「中江丑吉書簡集」の出版に寄せて

――「中江文庫」搬入のことども――

内田智雄

中江さんの生前、私はついにお目にかかる機縁に恵まれなかったが、不思議なかかわりあいで、中江さん旧蔵の書籍を、京都大学人文科学研究所に送り届けるについて、若干のお手伝いをさせてもらった。そして今、当時すなわち昭和十九年初めの頃の、中国と日本との輸送関係などを回顧すると、まことに稀有ともいうべき偶然や好条件にめぐりあわせて、蔵書の殆んどを亡失することなく、研究所に送り届けることができたわけである。そしてその経緯の大略は、小島祐馬先生が、京都大学人文科学研究所の「中江文庫目録」（昭和三十九年刊）の序文に記されており、また今回出版をみた「中江丑吉書簡集」の中にも誌されている。

「中江文庫」の搬入に直接関与した私が、主として私自身に関することを、改めてここに書き綴ることはおもはゆい極みであり、また好まないところであるが、中江さんの蔵書は、その「目録」によっても明らかなように、中江さん独自の学風を示す貴重な文献であり、「中江会」の人々、特にその門下の人々にとっては、書物の学問的な価値はしばらく措くとしても、その師の学風を伝え、あるいは知己の風格を偲ぶ上で、何物にも替えがたい遺品であったと考えられる。そしてそれを、あの当時において、大過なく研究所に届け得たということは、いま顧みてやはり幸運で

あったと思わざるを得ない。

然しそれらの書物の郵送や運搬については、随分多くの人々の協力援助を得ているのであるが、とりわけ北京の書肆文奎堂の張寿鳳氏のそれは特筆すべきものであって、ここに私が当時のことを回想して、あえてこの一文を綴る所以のものは、遙かに同氏に謝意を表したいということと、いまひとつ、文中自ら明らかになるように、かって十年ほど以前、はしなくも結んだ同学の士との約を、この機会に果したいということとによるものであって、必ずしも書物の郵送や運搬にまつわる挿話を記するのが、決して本稿の目的ではない。従ってこの稿は、中江さんの書簡集の内容については殆んど言及するところがない。同書の内容については、偶見の限りにおいても、武田泰淳氏の「革命期の中国と日本人」（朝日ジャーナル、二月七日号）、朝日新聞の「日中交渉史の資料」（一月二十日、学芸欄）などがあり、すでにその簡略な紹介が行なわれている。

私が当時、北京の満鉄調査部北支経済調査所に、華北農村の慣行調査担当の一員として赴任したのは、いわゆる大東亜戦争なるものの勃発の前年、昭和十五年六月のことであった。そしてそののち、所内での雑談のついでに、時折、中江さんのことについて耳にすることがあった。それは、例の五四運動の際における中江さんの曹汝霖や章宗昌に対する勇敢な義侠的行為や、訪れた某師令官を門前ばらいにしたとか、非常に几帳面な読書生活を送っていられるとかいった類のものであった。そして私は、ひそかにそれらを、多分に伝説化した挿話であろうとぐらいにしか考えていなかったが、今回の「書簡集」に付せられた加藤氏の「中江丑吉・鈴江言一年譜」を読んで、それらがいずれも、虚構の伝説ではなかったことを知った。すなわち「年譜」は、五四運動の際における中江さんの行為を、「生涯にただ

一度の大きな外的事件で、この時だけ中江の名が大新聞に出た。旧友への個人的な友誼が、歴史の反対側に中江の名を留めた」と記している。また某師令官の門前ばらいというのは、おそらく「年譜」が、「前年からこの年へかけて、北支那方面軍司令官多田駿（旧知の大将、辻野剛次郎の親友）が中江に顧問を懇請、二度拒否した。この前後、獄中の佐野学から来書、事変の泥沼を批判し、自分らに処理させなければだめだと書いていた。『佐野は死ねばよかった』と言い、依頼された漢籍を送る」とあることが、多少歪められて伝えられたものであろう。また中江さんの几帳面な読書生活については、年譜によると、大正九―十年（一九二〇―二一）、中江さんの三十一―二歳の頃のこととして、「この頃から朝四時に起き、午前中門を鎖して読書に没頭した。勉強と見なした読書は殆んど漢籍と英・独（後に仏）の原典のみであった」とあることをいうものであろう。

またこうした単なる噂話だけでなく、当時新聞や雑誌に盛んに評論の筆をとっていた杉山平助が、中江さんに嘲弄せられたということを身近な人からきいたことがあるが、これも「年譜」によると、昭和十二年八月に、「杉山平助（朝日新聞、評論家）が訪れ、下等な話を持出して中江に嚇怒され、鈴江に外へつれ出されたという」と記してある。

このように私は、われわれの調査所から余り遠くない地域におられる中江さんについて、いろいろなことを耳にしておりながら、それは単にそれだけのこととしてしか印象にとどめていなかった。そして私が中江さんのことを深く脳裡に刻みこんだのは、小島先生が来燕せられた昭和十五年の九月中旬以後のことである。このとき先生は、北京飯店に三泊せられたが、その一日、「貢院のそばまで行ってくる」といって一人で出かけていかれた。それが中江さんの訪問であったことは、「貢院」ということばからして私にはすぐ推知せられた。そしてそのことが、中江さんという人を私に深く印象付けしめたが、その理由は私に今だに明らかでない。このころ中江さんは五十一歳で、この年の

二月に「資本論」を読み終え、四月からヘーゲルの「精神現象学」を読み始められており、さらに週に一度、加藤氏その他の人のために、「資本論」を教えられたと「年譜」は記している。他方、鈴江さんは四十六歳であった。鈴江さんは昭和十四年五月、肺結核のため九州大学病院に入院せられたが、この年すなわち昭和十五年八月には治癒して退院、上海へ帰られている。「年譜」の九月の頃には、「日独伊軍事同盟が締結、中江は日独の必敗を確信し、人々に憚りなくそれを説明した。近衛首相からの時局収拾に関する招請を拒否したのもこの頃であろう」とある。また前記の北支方面軍司令官多田大将からの顧問招請を再度にわたって断ったのも、佐野学からの来書も、「年譜」は前年からこの年の十月頃のこととしている。

小島先生が中江さんを訪ねられたのは、丁度この前後のことであって、中江さんとの間で、どんな会話をされたものか、学問のことか戦争必敗のことか、中江さんと小島先生という二人格の対話は、私には極めて興味深いものがあったが、もちろん知る由もない。とにかく「奇人」といわれていた中江さんに対して、以前に比べて一層深い関心をいだくようになったのは、実にこの時からである。小島先生は九月十六日に北京を立って張家口に行かれ、二十日に再び北京に帰られたが、この頃、人文科学研究所の教授であった高坂正顕氏が、華中方面から北京に入られ、御一緒に満鉄公館でお話をきく会をもったことがあるが、高坂氏もこのとき中江さんには会われなかったように思う。

かくて私は面識のないままに、中江さんは昭和十七年八月三日、九大病院で五十三歳をもって世を去られた。

鈴江さんに私がお目にかかったのは、昭和十九年の三月頃のことであったと記憶する。そしてこれが、最初の、そして最後となってしまった。「年譜」によると、鈴江さんは五十歳であった。私が鈴江さんを訪れたのは、中江蔵書

の人文科学研究所への搬出に関連してであるが、鈴江さんが私に話されたのは、後に記するように、主として中江さんの遺稿、特にその雑録の出版のことであった。

いま中江蔵書が「中江文庫」として、人文科学研究所に寄贈されるに到った経緯を、「中江文庫目録」に寄せられた小島先生の「序」の一節に徴してみることとする。

昭和十八年の夏、私が高野山の三宝院に滞在していた時、当時北京にいた加藤惟孝君が、思いがけなくはるばる私を訪ねて来られた。要件はその前年の八月に亡くなった中江丑吉君の蔵書を、京大の人文科学研究所に寄贈したいということであった。そのいうところによると、中江君が不治の病を獲て九大病院に入院する時、万一のことがあった場合、蔵書の処分は加藤君と鈴江言一君の両人に一任するということであったので、中江君の歿後、北京在住の同君旧知の諸君を集め相談した結果、私と中江君との個人的因縁から、私がもと関係していた同研究所へ寄贈するのがもっとも適当であると決定したということで、猶此等の諸君の総意として、もし同研究所が寄贈を受諾するならば、これらの図書は中江文庫として別置してもらいたいということであった。中略 私は早速加藤君の来意を人文科学研究所に連絡したところ、同研究所ではよろこんでその贈物を受けるということになり、所長の高坂正顕君は同年十二月北京出張の次、一応それらの図書を検分したということであった。下略

と。中江さんの蔵書はこのような事情で、研究所に寄贈されることになったのである。そして「序」に記されているように、昭和十八年十二月に、高坂所長は北京に来られて、「中江旧廬」を訪れて、その蔵書を見られた筈である。然しそのとき私が同氏に随伴していったのか、またそのとき蔵書を日本に搬出するについて、なんらかの依嘱を受けたのかどうか、今の私には確かな記憶が残っていない。ただ、当時船板胡同にあった陋屋に高坂氏を招じ、また梯明

秀氏にもきてもらって、家族とともに夕食のすき焼をつついたことをのみ徒らに覚えている。

然しこの稿を書くために古いメモを整理していたところ――これは私が日本に持ち帰り得た極めて少数のもののひとつである――その中に次のようなことが記されているを発見した。それによると鉛筆書きで、昭和十九年二月六日（日曜日）の日付の下に、

一、中江氏メモ　四十数冊　写真

二、蔵書発送と木箱の件

三、目録の作製と書籍の冊数

四、大使館石井氏に連絡の件

五、京都大学より輸送費送金の件

六、京都大学より挨拶のため研究所々員来燕の件

とある。一から四までは中江蔵書の内容や発送方法に関するもので、中江さんのメモ（雑録）四十数冊は、加藤氏も、後に記するように鈴江さんも、最も重視せられていたもので、これも当初は、私に托そうという話のあったものである。「写真」はいま「書簡集」の巻頭に載せられているもので、これより他にはなかったように思う。

「中江文庫」が人文科学研究所に寄蔵せられた後、この写真を、故人の遺影として掲げておきたいという、門弟諸氏の意向であり、これをメモと一緒に私に持ち帰れということであったと思う。「蔵書の発送と木箱の件」とは、最初、大部分の書籍を木箱に詰めて、汽車便――当時すでに船便は殆んど不可能であった――で送ろうと考えたのであるが、鉄道輸送の状況から、大量の荷物の運搬はこれまた不可能であり、かつ当時の北京では、もはや長途の輸送に堪え得

る木箱も釘の入手も困難であったので、ついにこの輸送方法を断念したわけである。然し如何なる送付の方法をとるとしても、蔵書目録の作製とその集計とは必要であったので、満鉄の渡瀬成美氏のはからいで、その目録を満鉄事務所でタイプしてもらったと記憶している。次に大使館の石井氏には、後記するように、中江蔵書の中の「禁書」を、如何にして無事安全に日本に持ち帰るかについての連絡である。

またつづいて私のメモには、日付なしに次のことが記されている。

帙一部　十三元（三二〇部　四一六〇元）

小包に要する紙および郵費一箇ニツキ三元四毛

総部数　一七〇〇箇（一六〇〇箇ノ予定ノトコロ）五七八〇元

さらにその次に墨書で、

帙一部　十四元　三四〇部　四七六〇元　送費共一〇五四〇元　隆福寺前街七号（電二五六八番）光華運輸部

とある。これは中江さんの蔵書のうち、帙に入れられていない書物は、運搬や輸送に不便であり、かつ損傷亡失の危険もあったので、まず帙を作るために見積りをさせたところ、帙の価格にも部数にも、また郵送費（小包紙や紐を含む）にも変動をきたしたことを記するものである。そしてそれらは、隆福寺街の光華運輸部から発送することとしていたもののようである。

然るに二月二十六日のメモにはまた次のようにある。

一、日本人ノ店ニテ小包紙ト紐ノ件交渉

二、文奎堂ノ張氏ト相談スベキコト

出来タ帙ヲ検分スルコト、一万元ニテスマスヨウニスルコト、小包の包紙ノ質ヲワルクシテ安クスルコト、一部小生持参ノ場合ノ木箱ノ件

三、小倉氏ニ連絡スベキコト

華北交通ノ手荷物ノ件

蔵書目録ヲ渡スコト、至急ニ書物ヲヨリ分ケルコトノ依頼

四、小包ニ番号ヲ付シ、ソレト照応スル目録ヲ作ルコト

当時の記憶をたどってみると、これは人文科学研究所から、輸送の全費用を壱万円以内で処理してほしいという電報に接したので、すでに払底し高騰していた小包用の紙や紐を、日本人の店で買うことによって、従前の見積りよりも低廉にあげようと試みたことを物語るものであるが、大量の紙や紐は、すでに北京の日本商人の手もとにはなく、悉く中国商人の手中に帰しており、そのため文奎堂の張氏に全部を任すこととなったのである。

いまこれらのことを回顧すると、二月の初めにはすでに中江蔵書の輸送を、私は全面的に引受けているもののようで、してみるとそれは、高坂所長来燕の十二月のことか、それともその後一月中に、書信によって改めて委嘱せられたか、そのいずれかであるが、今となってはどうしても想い起せない。そして次のメモには日付なしに、

漢籍　二千斤　外図書　一千五百二十斤　計一千二百包

とある。これは漢籍と洋書とを分けて、それぞれの斤量をはかり、小包一箇の重量の制限内で、郵送するために行なった作業のようである。小包の箇数合計がさきのメモより減少しているのは、さきのメモがおそらくその概算であって、かく斤量を現実に計ってみることによって、ほぼ正確な小包箇数を算出し得たものと考えられし、他方、「禁書」

とされていた社会科学関係のものも、私が持ち帰るということによって、おそらく上記の斤量や箇数から除外されていたと考えられる。そしてかく書物の斤量を計っているところをみると、書物は中江さんの居宅からすでに文奎堂か光華運輸部に移されていたと考えて間違いはない。然し私は、中江さんのところから書物を運び出す前に、中江さんの旧廬を訪れて、書斎の書物の態様を見せてもらい、その在りし日の面影を感慨深く偲んだことがある。それは確か余り寒くない日であったが、二月の終りか三月初めの頃のことであったであろう。加藤氏がおそらく石家荘に応召せられたあとのことで、多分私一人であったと思う。

東面した大門の右の柱には「中江旧廬」の門標があった。この「中江旧廬」は曹汝霖氏の邸宅の南の一隅にあり、道をへだてて東は貢院の跡（当時、北京神社なるものが建てられていた）であり、内部は「樹木の多い庭で、東棟に書斎と応接間兼書庫があり、廻廊が庭の北端をまわって寝室・居間・食堂のある西棟に通じていた」と「年譜」は記している。まことに中江さんの読書と思索の生活にふさわしい閑寂なたたずまいで、大正八・九年頃から二十年余りここに住まわれたわけである。主人のない「旧廬」には、人の好さそうなボーイ一人のみがいて、快く案内をしてくれたが、これが「年譜」に記する中江さんの「最後の召使いとなった」馬君であったと思われる。書斎には漢籍と英・独の洋書とが混然一体をなして並べられており、尋常の中国学者の書斎とは自ら異なった雰囲気が漂っていた。いまこれを小島先生の「中江文庫目録」の「序」によると、

上略　中江丑吉君は中江兆民の令息で、大正二・三年頃東大政治科を卒業してから昭和十七年五十四歳で病歿するまで、その後半世を北京で過した孤高の士であったが、つとに中国古代政治思想史の研究に専念し、清代経学者の注解によって中国の古典を読むかたわら、これを整理するに西洋の哲学書や社会科学の書を読んでいたので、その蔵

書はそういった方面の漢籍と洋書が大部分を占めていた。下略

とある。私が中江さんの旧宅を訪れた目的は、このような書斎の様相を見定めておきたいということであった。それは中江さん旧知の人々の希望として、「これらの図書は中江文庫として別置してもらいたいということであった」（小島先生「中江文庫目録」の序）のみならず、私が直接中江門下の人々からきいたところでは、中江さんの学風を偲ぶに足るような形で、できるならば存置してほしいということであったからである。そして私は今なお、中江旧廬のわびしくも静かなたたずまいと、その書斎の雰囲気とを、忘れがたいものとして心に銘記している。

つづいて二月二十九日の私のメモには、

小倉氏電話、輸送用ノ木箱ノ件、大使館ノ連絡、華北交通会社ヘ断リ、郵送ニ決定、中江先生メモ類ノ件

などと雑然と書かれているが、これは小倉氏に電話連絡した事項を記したものである。とにかくこれによると、蔵書を木箱に詰めて送ることを断念し、従ってそのために便宜を供興されることになっていた大使館と華北交通とにその旨を連絡し、大部分を郵送に決定したことを報じ、かねてから私に話のあった中江さんの書かれた雑録四十数冊を、如何に処理するかについて、私が小倉氏に質したものと思われる。

いまこれらのメモをたよりに回想すると、二月の初めから下旬にかけて、木箱による鉄道輸送と、小包による郵送とを並行して考えていたもののようで、鉄道の輸送においては木箱や釘の調達がまず第一に困難であり、小包便においては紙と紐の払底から経費の困難があり、若干苦慮しつつあったことが看取されるが、ついに二月末には郵送に決定したことが知られる。

かくて二月二十九日以後、おそらくはその直後において、私は人文科学研究所に次の電報を打っている。

オホムネ一マンエンイナイニテシヨリシウルトオモウ」三ガツナカゴロタイレンニテンニンニツキソレマデニカネヲニウシユシタン」キフネガイハ三ヒゴロオクルアトフミ」ウチタ

すなわち「おうむね一万円以内にて処理し得ると思う。三月中頃大連に転任につき、それまでに金を入手したし。寄附願は三日頃送る、あと文」というのである。この電報は、大体の送費の見通しをつけてそれを通知し、あわせて満鉄大連本社への私の転任時期を報じ、蔵書の輸送に要した費用の送金を督促したものである。私の大連への転任というのは、昭和十五年以来従事してきた華北農村の慣行調査が、戦争の敗色が濃くなるにつれて、昭和十八年の秋には、われわれが農村に出向いての調査は、実際上殆んど不可能となってしまった。それは単に農村の治安の悪化ということばかりでなく、われわれと極めて親近な関係にあった農民たちが、調査に協力を拒むようになって、すくなくとも私は、もはや北京にとどまることの意味を失なってしまい、当時のいわゆる内地に帰ろうと考えたのであるが、「仕事をまとめて帰れ」という小島先生の指示に従って、大連の本社で、これまでの調査の取りまとめをしようと考えたからである。なお電文に「寄附願」とあるのは、国立大学というところは面白いところで、寄附するものの方が寄附の「願」を出して、大学の方がそれを許可するということであって――これは今なお左様であると心得る――そのための中江蔵書の寄附願なのである。この寄附願を三月三日頃に人文科学研究所へ送るというのである。

つづいての私メモに次のような計算が書かれている。

九千百四十二元一毛　文奎堂払
五百元　文奎堂謝礼
百三十元　木箱三箇荷積費

五十元　　蔵書目録タイプ五十枚分

五百元――六百元　　請客費

このメモの最後の項の「請客費」は、蔵書を全部送り納めてから、中江蔵書の関係者及び搬出について協力をせられた諸氏に対して、やがて来燕することになっていた研究所の謝礼の使節が、一席の小宴を設けるであろうその予算であって、従ってこの「請客費」を除けば、さきの私の電文のように「一万円以内にて処理し得る」ということになるのである。

ここで私は、中江蔵書の搬出に対する特別な協力者として、文奎堂の張氏について言及しなければならない。そしてそれが、私をしてあえてこの拙文を書かしめた主たる理由でもあるからである。

上記のようにメモをたよりとして当時を回想してみると、中江蔵書の輸送については、小島先生や高坂所長と私との関係上、最初からすべてを私に一任されていたもののようである。従って文奎堂に書物の運搬輸送の仕事を依頼したのも、実は文奎堂の張氏と私との個人的な関係に由来している。もちろん中江さんの蔵書の中には、文奎堂から購入せられたものも少なからずあったであろうが、そのこととはまったく別個に、彼はこの仕事に協力してくれたものと考えられる。あるいはまたこれは、張氏のまったく個人的な協力であって、文奎堂自体は直接には関与していなかったかも知れない。とにかく中国の古い大きな書肆の内部事情は、私などの窺い知り得るところでは到底ない。私が文奎堂の張氏にこの仕事を頼んだのは、書物をどのような方法で送るとしても、そのことに要する時間や労力が私になかったことが第一であるが、郵送するについても、それに必要な大量の紙や紐の購入が、私の手では困難であった

こともそのひとつの理由であった。当時すなわち昭和十九年の初頭には、北京における物価上昇は、物資不足と相俟って実に甚だしいものがあったが、比較的には、中国人の店より日本人の店の方が、物品の値段は安かったわけである。そこで、さきのメモにも見られるように、郵送用の紙や紐も、一応は日本人の店で求めようとしたのであるが、この時すでに大量の紙や紐は、日本人の店には在庫がなく、さりとて中国人の店では、予算の関係上、購入し得ないような高値となっていた。途方に暮れた私が、文奎堂の張氏に相談したわけである。すると氏は、文奎堂の所蔵する紙と紐とを実費で提供して書物を郵送し、郵費と若干の手数量とを支払うことによって、この仕事を引受けようというのであった。まことに当時の物資不足と物価高騰の折柄としては、願ってもない幸運にめぐまれたわけである。その結果、さきのメモに見られるような書物郵送費の見積り額となったわけである。

然しながら張氏の快諾を得て、現実に郵送に着手し、そしてそれを送り終えるまでには、ほぼ二ヵ月有余の日子を要しており、その間、北京の物資不足はますます深刻を加え、物価は日に日に上昇の一途をたどっていたが、京都からは一向に経費の送付がなく、他方私は、文奎堂に対する張氏の立場を考えると――彼はもちろん店主ではなく番頭にすぎない――居ても立ってもいられない感じで、しかもそれは、氏が私との友誼によって引受けてくれたものであるだけに、私としては一層道義的な責任を感ぜざるを得なかったわけで、さきの送金を促す研究所への電文も、その一端を物語るものであるが、ついに私は三月某日の日曜日に、かねて手紙で日時を打合せておいて、北京の満鉄事務所から京都の人文科学研究所に電話をかけることとした。電話に出られたのは、当時研究所の事務長であった松原氏（現神戸大学文学部事務長）であったが、同氏との通話によると、大蔵省に特別会計として申請した中江蔵書の輸送費は、いまだ認可にならないということ、また認可の時期も未定であるということであった。他方、私の大連本社へ

の転勤の時期もだんだんと切迫しており、研究所からの送金を空しく待ってはいられない事情にあったので、かねてから宿題であった郵送し得ない社会科学関係の蔵書九十数冊を、前記メモに見られるように木箱につめて、それを私が持って人文科学研究所に届けることによって、大蔵省の認可あるまでの時間を埋めることとした。ところが、この書物の運搬が難事中の難事で、それは単に当時の交通事情の困難ばかりでなく、書物の性質や内容に関するものであった。いまこれを小島先生の「中江文庫目録」の「序」の一節に徴してみるとしよう。

「上略　ところがそれらの図書を北京から京都まで運んでくることには、当時いささか困難な事情があった。それは時あたかも大平洋戦争が進展して、大量の貨物の輸送が漸く制限されようとしていたのと、それに中江君の洋書の中には、当時国禁となっていた社会科学の書が若干含まれていたからであった。幸に漢籍の方は、北京の書肆文奎堂の張某が、少しづつ小包郵便に付して全部を送ってくれ、洋書の方は、北京の日本大使館にいた中江君の知人の配慮で、書物の箱に一々公用の貼紙をしてくれ、当時北京の満鉄の出張所にいた内田智雄君が、義侠的に書物に附添うて京都まで無事送りとどけてくれたのであった。それは昭和十九年の三月頃のことであった。下略

と。また「中江丑吉書簡集」の「年譜」に、加藤氏は次のように記している（四四六頁）。

二月加藤が石家荘の部隊に応召。書店文奎堂を通じて中江蔵書を京大人文科学研究所に送る。内田智雄小島門下。当時満鉄内の中国経済旧慣調査に入り北京に在住　らの努力で四月に完送した。洋書五三三部七九九冊、漢籍三五五部六〇三七冊、（現在「中江文庫」として同所に保管）。

と。この「当時国禁となっていた社会科学の書」九十数冊は、前記のメモに見られる木箱三箇に納め、それぞれの箱に別に「公用」と墨で大書し、その上を厳重に縄で縛ったが、これは万に一にも途中で開くことを命ぜられないため

の用意であった。なお別に、北京大使館の石井参事官から、この三箱の内容が大使館の公用の物であることを、公用の用紙にタイプ印刷して公印を押した証明書をもらった。この証明書は、私が大使館に出かけて、石井さんから直接にもらったものである。当時、わが国の状況のもとでは、いわゆる「国禁の書」の運搬など、思いも及ばない危険なことであって、相当な決意なくしては到底敢行し得ないのであって、この石井さんの証明書がなかったならば、私はこれらの書を携行する自信をもち得なかったこというまでもない。そのことは、私が昭和十七年の冬、華北農村慣行調査に要する研究書購入のために帰朝して、相当多数の書物を買求めたことがあるが、特に禁書とされていたロシヤ関係の翻訳書、わが国の唯物史観の研究書、たとえば「日本資本主義発達史講座」など、秘密裡に大量に買い集めたが、搬出するについて神戸税関や、当時の特高警察に目を付けられ、辛うじて無検査で通関した苦い経験をもち合せていたからである。そうした意味で、私は私として、石井さんに感謝の念を禁じ得ないものがある。然し石井さんが中江蔵書とどんな関係にあったのか、小島先生の「序」にあるように、中江さんの「知人」であったのか、それとも満鉄の渡瀬氏などの関係によるものであったのか、私には不明のままで今日に到っているが、この稿を草するにあたって見出した当時のメモに、小倉倉一氏への私の電話の控えに、「大使館ノ連絡」とあることによって、石井氏は小倉氏と関係があり、従ってまた小島先生の記されているように、やはり中江さんの「知人」であったと推測せられる。

かくて私は、中江蔵書のうちの漢籍と一般的な洋書とは、文奎堂を通して京都に郵送し、他方、いわゆる禁書を木箱三箇に詰めて持ち帰る準備をしたのであるが、ここでいま一度、文奎堂の張氏のことについて記することを許していただきたい。

先記のように張氏は、郵送用の紙と紐とは、文奎堂の在庫の品を原価で提供してくれることを約してくれたのであるが、現実に北京の物価、特に紙紐類の市価は想像を絶するほど高騰しつづけていて、如何に約束とはいえ坐視し得ない状況にあり、加うるに予算のわくは一万円ということで、その上、京都からの送金は、何日のことかめどが立たないという事態に直面して、居ても立ってもいられないというのが、偽らざる当時の私の心境であった。然し当時、完全な統制経済下にあった日本では、北京における異常な物価の高騰など、想像するだに困難なことであったであろうし、他方、大蔵省の官庁仕事は、北京の物価事情などもちろん関知するところではなかった。そこで私は、ある日、張氏を招いて事情を打あけ、かつ私の心境を彼に語ったことがある。そのとき彼は私に次のように語った。「若し紙や紐を今買うとすれば、とてもあの価格では送り得ないけれども、文奎堂が以前安い時に購入したものであるから、その時の原価のままでよい」と。私は彼のこのことばをきいた当時の感激を、二十年を経過した今もって忘れ去ることができないでいる。それは単に当時の私の苦衷を癒してくれたということばかりでなく、然諾を重んじ信義を尊ぶ中国人の一般的心性を、とりわけ彼と私との「朋友的関係」を、身をもって体験し得たことの喜びでもあった。然しこの話には、後に記するような後日談がある。

ここで話はやや岐路にわたるけれども、この張氏のことと関連して、私は書き添えなければならないいまひとつのことがある。

それは、今から十年余り前のことであるが、天理大学で或る学会が催された。私は、たまたまその懇親会の宴席で、福井康順氏と江上波夫氏との間にはさまって、盛んに酒盃を重ねるうち、話はいつのまにやら北京のことに移り、そして文奎堂の張氏のことに及んだ。そして両氏相共に張氏の人物を激賞すると同時に、もし何かの機会あらば、新聞

なり雑誌なりに、張氏のことを称揚してほしいという要望であった。おそらく両氏も北京留学中に、張氏からなんらかの世話を受けたことがあったことによるものであろうが、私もまた心から同感を禁じ得ないものがあり、かつ酒席のことでもあり、私は自然な機会に一文を草しようと約してしまった。然し当時なお日中間の関係には、細心の注意を要するものがあり、特に個人の名をあげて記することには、躊躇せざるを得ない事情があったので、両氏への約は果し得ずして今日に及んでいる。私は北京に赴任して以来、中国の家族制度の調査研究を任としたため、今にして思えば、莫大な予算のもとに、族譜家乗の大規模な蒐集に着手し、他方私自身も、期末手当その他の収入のすべてを、漢籍の購入にあてていたので、北京の書肆の商人は、殆んど私のところに出入したといっても過言ではない。その中にあって張氏は、見はからいで持来する書物といい、私が註文した書物といい、いずれも適正な価格をもって持来するのが常であって、かって一度も不信の念をいだかせたことのない、殆んど唯一の人であった。また個人的なことではあるが、私の長期の調査旅行中には、留守宅を訪れて子供の遊び相手となり、子供たちもまた彼に非常によくなついていた。戦争がはげしくなって、北京でも現地応召をする留学生や文化人がでるようになると、彼は時折それらの人々の留守宅を見まわっていたりした。彼は人となり誠実であるとともに、人に阿諛迎合して利を得ようとする商魂をもたず、他面、学者に対する礼儀作法もよく心得ていて、おそらく第一級の商賈と評しておそらくは過言でないであろうと思う。彼は私が北京を去るにあたって、宋板の通鑑綱目一葉を贈ってくれたが、私はそれを彼との友誼を偲ぶよすがとして、今になお愛蔵し珍重している。彼の名は鶴齢、号は寿鳳、河北省交河県の人である。別離以来二十年余、遥かに彼の健在を祈っているのは、ただに福井、江上の両氏や私のみでないことを信じて疑わない。

かくて私は、中江蔵書の郵送や禁書搬出の準備を終えた四月のある日、西長安街織女橋乙三号の鈴江さんの宅を訪れた。それは比較的に温い陽光のさしていた午後であった。鈴江さんの住居は西長安街の路西にあって、門標には「王寓」と書されて右側に掲げられていた。門内は院子をはさんで南に一棟、北に一棟あって、その北側の南面した一棟が鈴江さんの仮寓で、南側の一棟は、私の記憶に誤りがなければ、九大病院で鈴江さんの最後をみとられた武田鳳徳氏のそれで、当時、同氏は張家口の方に出張中で不在であった。これは鈴江さんからきいたように思う。

鈴江さんは一番西の房子の中央のベッドに、頭を北にして仰臥しておられた。私はベッドの西側の椅子に座し、鈴江さんは仰臥したままいろいろ話をせられたが、当時、私の鈴江さんに対する知識は、姓を王と名乗り中国人として、労働運動や革命運動に挺身してきた人ということ以外には、なんの知識も有ちあわせていなかったことと、私自身が、書物の郵送や搬出という慣れない仕事に疲労していたことと相俟って、私は鈴江さんの病床からの話を、惜しいことに殆んど記憶に残しておらず、ただ浪子夫人が心から接待して下さったことや、かいがいしく鈴江さんの世話をしておられたことのみが、いたいたしい印象として、今になお深く胸に刻みこまれて残っているにすぎない。

鈴江さんは「年譜」が誌しているように、土工や人力車夫や新聞配達をして苦学をせられ、大正七年、二十七、八歳の頃には、米騒動に早くも参加し、やがて中国に渡っては、胡鄂公や斉白石などの同志として、労働運動や革命運動に参加した人であって、尋常な書斎の学者でもなく、さればとて、単なる活動的な革命運動の闘士でもないことは、凡庸な私の眼をもってしても、容易に察知することができたわけであるが、この最初にして最後となった生涯ただ一度のめぐりあいに、鈴江さんから学びとるものを殆んどもち得なかったということは、私の終生の恨事であるのみならず、鈴江さん自身も、当時の私を目して、中江蔵書の、しかも「国禁」の書を托送さすのに、さだめて心もとなく

感じられたことであろうし、さらにまた、小島先生の弟子にもこんな不肖な弟子がいるのかと、ひそかに嘆息をもらされたであろうことを思うとき、いまなお冷汗の背筋を走るの感を禁じ得ないものがある。そして同じことは、中江さんについても、また同じことがいい得るであろう。その意味において私は、やはりお目にかからなかったことが、却って幸いであったかも知れないと考えている。

このようなわけで、鈴江さんが私に話かけられたことばは、今は殆んど記憶にとどめていないが、私のメモには次のようなことばが書きとめられている。

一、跋ハ小島先生ニ依頼スルコト。コレハ加治隆一氏ニ伝達スレバヨイ。

二、フセ字ノ有無ト抜刷式。序文ノ省略ハ不可。

と。これはさきの私のメモにあった中江さんの「メモ四十数冊」の印刷に関するもので、メモの内容は、当時の政治状勢のもとでは、そのまま全文を公開することの憚られるものがあったので、その部分を伏字にするか否か、また同じ主旨から、その内容如何によって、抜刷のように別冊にすることが、友人知己に配付するのに好都合であると考えられたもののようで、それら雑録には、小島先生に跋を書いてもらうこと、序文は必ず載せるようにとの意である。従ってこれは付印するとしても、必ずしも公刊することを意図したものではなく、いわば私版であるわけである。

かくて私は、三箇の書籍入りの木箱と、私自身のトランク一箇とを携えて北京を出発したのであるが、それが、何日のことであったか確かな記憶がない。私のメモによると、五月四日の朝十時に、人文科学研究所で高坂所長に会っており、私も一路京都に直行しているから、おそらく四月の末日に北京を出発したものと想像せられる。そして道中

私は、大使館の証明書を後生大事に懐中していたことはいうまでもない。当時、戦況は頗る逼迫していて、東亜海運などの船便による安易な交通は到底望むべくもなかったので、もちろん汽車によることとしたが、私が最も憂慮したのは、列車を断えず巡視する警乗の憲兵の査察と、山海関の税関の検査とであった。

然し私が箱に張った「公用」の文字は、見事に効を奏して、山海関も無検査で通過し、憲兵の訊問も受けることなく、無事に下関に着くことができた。その時ひそかに私が思うたことは、権威や権力をかさに着るものは、より高い権威や権力に対しては、案外に弱いものであるということである。然し予想しない困難も若干あった。それは木箱三箇の置き場所の問題である。百冊近い洋書を容れた木箱三箇の容積や重量は相当なもので、列車の網棚に載せ得るようなものでは決してなく、止むなく木箱を座席に近い通路においたわけであるが、敗色頓に濃い戦況のために、海上交通は殆んど杜絶えて、華中華北満州などからの日本への交通路は、一にこの北京・奉天・京壌・釜山の鉄路に集中せられており、その混雑ぶりはまことに想像を絶するものがあった。そのため、通路に置いた三箇の木箱は、車中の往来を妨害すること甚だしく、山海関、安東、京壌などの主要駅で、車掌の交替するたびに新しく乗る車掌から注意を受けたが、そのつど、緊急にして重要、まことに止むを得ざる公用文書であることを陳弁これつとめて、とにもかくにも下関までたどりつくことができた。正直にいって、この時ほど「内地」という当時の用語の実感を、しみじみと感じたことはかつてなかった。

然し下関の関釜連絡船の発着場と、駅前広場の雑踏は筆紙につくしがたいものがあった。当時、下関駅前の広場は、華中華北満州朝鮮などから帰国する人と、逆に日本の各地から上記の諸地域へ往く人とが錯綜して、まるで坩堝のような観を呈しており、計四箇の荷物をもった私は、雑沓にもまれて二・三回顚倒したが、また木箱に足を取られて倒

れた人も二・三にとどまらずあった。然しとにかく辛うじて駅の構内にたどりついた私は、ここでまたもや思わざる一難に遭遇した。それは当時わが国では、旅客列車の混雑防止のために、旅客手荷物の制限を行なっており、これだけの荷物をもって乗車することは、到底不可能であることを知らされたのである。そこで三箇の木箱のみ、鉄道小荷物に托することも一応は考えてみたが、当時の輸送状況では、私が京都に滞留し得る極めて短い期間内に、これらの荷物の着否は保証しがたいということであったので、私自身の責任上、この方法は採り得ないこととなった。その時フト私の脳裡に浮んだのは、かつて高坂夫人からきいてたことで、夫人の令兄の河合氏が、名古屋鉄道管理局の局長をしていられるということであった。そこで私は早速、駅長室に行って駅長に交渉し、鉄道電話を借りて名古屋の河合氏に連絡し、同氏から特別な便宜の供与を下関駅長に依頼してもらおうと考えた。すると、事情をきいた駅長は、電話するまでもなく、駅長室から列車に直接荷物を積み込んであげようということで、ここでもまた、思わざる人の好意に恵まれて、やうやく荷物とともに「内地」の汽車に乗ることができたわけである。

かくて私が京都に着いたのは、おそらく五月の二日か三日ごろであったと思う。当時、中江蔵書の小包の受取り及び整理にあたっていたのは、私と同門の鈴木隆一氏であって、私はまず同氏にあって北京で作った蔵書目録を渡したが、北京から発送した小包が八四四箇であったのに対し、到着した箇数には若干不足のあることを知った。然し、当時の外地内地間の郵便物が、往々紛失していた一般事情からいって、それが極めて少数にとどまったことは、寧ろ偶然の幸運であったと諦めざるを得ないもののように感じた。そして、その亡失箇数が極めて僅少であったことは、おそらくは鈴木氏の手になると考えられる「中江文庫目録」によっても明らかであり、この点は、中江会の皆さんに改めて御諒恕を得たいと思う。

そして五月四日に人文科学研究所で高坂所長に事務報告をし、亡失したと思われる書物のリストを作り、また、人文科学研究所から中江蔵書受領の謝礼や挨拶をかねて、木村英一、坂田吉雄の両氏が、私の後を追って早急に来燕されること、その挨拶をする主な人や機関が、曹汝霖、鈴江、加藤、大田（？）の諸氏、および満鉄北支経済調査所、大使館等であることを確認した。そのとき私は、小島先生に報告の手紙を出している。他方、かねて申請中の大蔵省の特別会計の認可もあったので、北京の渡瀬氏あてに、「大蔵省の認可ありたるにつき、近日帰任す。帰途大連に寄り、赴任遅延の諒解を求めて帰燕す」と打電した。これらのことが私のメモに残されている。

このように一応私の任務を終えて、途中大連を経て北京に帰ったが、それは確か四月中旬であった。そして四月下旬か五月上旬――月日は明らかでない――に、予定の如く木村、坂田の両氏が来燕せられた。両氏には私との連絡の便を考えて、拙宅に近い船板胡同西口の都ホテルに泊ってもらい、ただちに文奎堂の張氏を招いて、中江蔵書発送に要した郵費および雑費の支払いについて話合ったが、張氏は日本語を解しないので、すべて木村氏がその衝にあたった。然るにどうしたことか、張氏はかつて私に示した金額では断乎として承知しない。事の意外に驚いた私は、交渉の途中、張氏を拙宅に連れていって、その違約を詰り、信義に反することを力説したが、彼は終始ニコニコしていて、私に「心配するな」と語ったので、再び連れだって木村氏等の宿舎を訪れ、その結果、約束の金額に若干プラスすることによって話はおちついたように記憶している。

どうして張氏はこのように態度をかえたのか、私にはいまだ十分に理解することができない。然し次のようなことを想定してみると、一応は理解し得ないでもない。もし張氏に支払う金額を、私から直接同氏に渡したならば、ある

いはこのような事態は起らなかったかも知れない。そしてまた支払者が日本の大学であり官庁であり、そのために二人まで日本から来燕したということによって、張氏は交渉如何では、増額もまた可能であると考えたかも知れない――彼に日本の官庁の会計の何たるかを理解させることは不可能である――事実、発送に着手して以来、三・四ヵ月を経ている当時の物価事情からすれば、むしろ当然すぎる要求ともいい得る。とにかく、このようなことから、要求するだけはしてみようと考えたのかも知れない。若しその新しい要求金額が、彼の真意に出たとするならば、交渉の途中における拙宅での彼のことばや態度は、私にはなんとしても理解することのできないものである。彼はこの交渉において、私の信頼する「朋友」としての彼と、商人としての彼との両面を示したわけであるが、私はこのことをもって、直ちに彼の背信を責める心にはどうしてもなれない。数年にわたる彼と私との親密な交際を通じて、すくなくとも私は、何ひとつ彼の信義を疑うべきものをも有ち得なかったからである。要するに彼は、中江蔵書の郵送については、何よりもまず、私との個人的な関係において引受けてくれたものと信じて誤りはないであろう。

こうしたいきさつが若干あったけれども、文奎堂の張氏に支払いをすませ、関係方面の挨拶まわりをしてから、一夕、中江文庫の関係者を王府大街の「鹿鳴春」にお招きして、謝意を表する晩餐会をもったが、文奎堂の張氏を招じたことはいうまでもない。そののち私は、木村、坂田両氏とともに曹汝霖氏に招ぜられて、同氏の邸宅で、豪華そのものともいうべき夕食のもてなしを受けた。また華北連合準備銀行に阪谷希一氏を訪れたが、それが木村、坂田両氏と一緒であったのか、私単独であったのか記憶が確かでない。

以上のような経緯を経て、中江蔵書は「中江文庫」として人文科学研究所に蔵められたが、その搬入のことにあたった私として、若干の所懐を述べることが許されるとすれば、研究所における右蔵書の保管については、かって「中江旧廬」にあったような態容を、できるだけ保存してほしいという中江さん門下の人々の希望が、現在の研究所の空間的条件のもとでは早急には実現しがたく、そのことを甚だ遺憾に思うものであるが、然しひるがえって、もしもこの蔵書の搬出の時期を、今少し遅らせていたとするならば、果してどのようなことになっていたかに思いをいたし、さらにまたこの「中江文庫」が、人文科学研究所において、十分にその機能を果している現況を考えあわせてみるとき、「中江文庫」の空間的物理的条件の不遇を超えて、中江さんや、またその門下の人々の意志は、ある程度生かされているということができるかと思う。

いま私は二十年以前のことを静かに回想して、まことに懐旧の情に堪えないものがあるが、とりわけ中江蔵書の搬出について、直接間接の協力をたまわった人たちに、改めて深甚の謝意を表するとともに、それらの方々の中には、鈴江さんを始として、すでに物故せられた人もすくなからずあるであろうと思う。謹んで冥福を祈る者である。